

英米児童文学論 — ナーサリー・ライム

Introduction to English Children's Literature: Nursery Rhymes

貝 嶋 崇

Takashi KAIJIMA

キーワード：英米児童文学，ナーサリー・ライム，マザーグース

英米児童文学とは何か。一見簡単に思えるこの問は、実は非常に大きな問題をいくつか内包している。まずその言葉の定義の問題が挙げられる。例えば児童という言葉の定義の問題である。児童とはいったい何を指すのだろうか。実は児童という言葉は異なるいろいろな定義がある。広辞苑のひとつの定義では学童期の子供を指していて具体的な年齢は6歳から13歳までのことであるとのことだ。また、もう一つの定義としては、法律上の概念で、大人と反対の概念として児童が定義されている。そこでは、年齢は未成年いわゆる18歳以下の子供をさすとなっている。こうして、見てくると日本国内だけでも児童の定義は、幅があり曖昧であることがわかる。さらに、この曖昧さに加えて、英米という単語と文学という単語とが加わって、英米児童文学の定義をさらに複雑なものとしている。

英語では、児童はchildとされており、その定義も様々である。childという語源は子宮という意味から来たものでありそこから、OEDでは生まれる前の胎児や生まれたばかりの新生児を意味していた。11世紀になると、現代の意味が付け加えられた。A young person of either sex below the age of pubertyがそれで、思春期以前の若い男女のことを意味している。この定義もしかし便宜的なものとしか思われぬ。なぜなら思春期になる前からも当事者にはもちろん男女の区別があるわけだから、思春期という区別自体がこの問題を考えるときには全く意味を持たない。

他にも、その定義を虚しく試みるものも多く見られた。しかしどれほど定義を厳密にしようと、まだ幅広く定義しようとしてもそれで捉えきれぬわけではなかった。オックスフォード大学出版局から出た、『オックスフォード児童文学百科事典』の中でJack Zipesは児童文学についてこう述べている。

Children's literature has come of age, and in fact, it is so mature, diverse, and complex that it is almost impossible to define, let alone describe and explain. This is always the more reason why we need an international encyclopedia of children's literature that seeks to be as inclusive and exhaustive as possible and yet acknowledges that this literature is practically indefinable, limitless in its scope, and daunting in its achievements.¹

ここでは児童文学の百科事典を編もうとしているものの、その試みが目前となり児童文学の裾野の広さと、時間的にも空間的にもほとんど無限に思える研究範囲深さとを想像しただけで、そのすべてを網羅的に定義することが途方もなく虚しく思えて、ほとんどやる気を失ってすっかり弱気になったという本音が吐露されている。しかしながら、これは、研究者としての弱みを見せていると

同時に、一方で途方もない研究対象に立ち向かおうと自ら士気を奮い立たせ、勇気を鼓舞している宣言だのとれる言葉でもある。

また、もう一つ解決しなければならない言葉の定義がある。それは「英米」と言う言葉の定義である。英語訳からも明らかなようにここでは、英語で書かれたもしくは英語になったという意味で英米という言葉を用いることにする。高杉一郎は『英米児童文学』の中で、英米という言葉が英語圏という意味で用いている。² しかし英語で書かれておれば英語圏の国と限定する必要もないだろうし、また、そこにはイギリスとかアメリカとかいった特定の国に限定するべきではないことも、これから論じていく過程で、その理由がおのずから明らかになると思われる。

本論文では、伝統的な尺度に従いこれまで児童文学と見られているものを順次に論じながら、児童文学とは何かという問題を考え合わせていきたい。

したがって、本稿では、児童を年齢で区分することをやめ、広辞苑の第二の定義、大人に対する対立概念としての児童という意味で、統一的に使っていきたい。

そこで、今度は文学という概念を入れた児童文学ということを取り上げて見たい。これまでは児童文学を一般の文学のひとつのジャンルとして見ようとする考え方があった。スミスは以下のように述べている。

児童文学は、一般文学の一部門であり、ほかの文学形式と全く同じ批評の基準に従わなければならない。これが根本的な原則である。この根本の考え方こそ、どのような種類の文学を評価する場合でも、よい本を選び出すという作業の底に、かならずなければならないものである。³

しかし、このように児童文学を一般文学に含んで考えてみる場合には、新たな問題が一つ浮上してくる。それは、児童文学と一般文学の境界がはっきりしないと言う点から生じるものである。おそらく、児童文学は一般文学の中に含まれるのであろうが、その立ち位置がはっきりとはしていない。また児童文学すべてが、一般の文学に含まれるのかといたらそれも問題として浮上してくる。つまり、含まれる部分もあり含まれない部分もあるというのが児童文学と一般文学の関係であろう。

児童文学の抱える問題点

スミスは『児童文学論』の第1章で「児童文学の問題」を取り上げている。一つは子どもと大人の両方に見られる普遍性の問題であり、もう一つは文学の価値判断の問題とようやくできるようだ。それは子どもの読書のあり方に注意点が向けられている。

たとえば、子どもの問題は、おとなの問題よりも単純だが、同時に、大人の問題よりもはるかにずばりと事物の核心につきいる。おとなは、真偽、善悪、幸不幸、正不正のような道義的な問題を、いろいろなところに当てはめてとやかく言いたがるものだが、子どもは、それらのものの抽象的な区別を、理屈抜きで感じ取ってしまう。そして、優れた子どもの本は、問題の取り扱い方が、ずばりと明快である。価値判断が、健全で直截である。しかも、これらの問題がお説教で語られずに、むしろ作品の内側に暗に含まれている。⁴

スミスの指摘は1つには子供の持つ直感が児童文学の大人の価値判断よりも上回ることである。さらに、児童文学の中に道義的な問題を見出すことの問題点も取り上げられている。スミスの考える

健全で直截な価値判断がどのようなものを指すのか、またその判断をする際の基準についての具体的な言及はないが、とりあえず、子供が文学を理解する過程についての言及がなされていることには、留意しなくてはならない。

またさらに子どもの読書についての別の誤解についてもスミスは言及している。それは子供時代の経験は大人の経験に比べてはるかに大切ではないという誤解についてである。それについて、スミスは子供の経験のほうが大切ではないという理由はまったくなく、その経験はむしろ強い印象となって、永続的にその人に影響を及ぼすというものである。さらにはその人格の形成の一助にもなると明言している。

さらにスミスは、C.S. ルイスの以下の言葉を引用している。それは10歳の時に価値のある本は、50歳になって読み返しても同じように価値があるというものでなければならないという内容の言葉である。ここでは文学の価値の普遍性をルイスが強調しているとともにその楽しみは永続的なものであると断じている。しかし、普遍性や永続性の問題はある意味立ち入ることが危険な領域である。それは文学の価値判断をするものが時として陥りやすい幻想の領域である。無文学は普遍的で永続的なものが望ましいのかもしれないが、普遍的である価値基準、永続的である価値基準をどこに求めるべきなのであろうか。人間の生命が限りある中で、永続的な基準が発見できるであろうか甚だ疑問である。また、その価値の評価についてもどの人間にも普遍的に当てはまる規範など果たして存在するのであろうか。

児童文学の価値基準を考えていく中で、我々が最も気をつけなくてはならない点は、よく陥りがちであるが、大人が子供よりも優位であるという傲慢な視点から児童文学を捉えてはならないということである。

したがって、児童のためだけに書かれた児童文学とは、ある意味本当の文学には属さないのかもしれない。スミスは最終的には児童文学の対象となるのは、一般文学の分野でもまた、子供の本だけを書いている作家たちの作品だという判断を示している。

児童文学とは何かの定義が難しい中で、児童文学を論じるという矛盾がここに見て取れる。それは先ほどジップスが示したようにそれぞれの作品や作家を具体的に説明していくことで、抽象的ではあるが、しかし児童文学とは何か宇宙のような茫漠とした曖昧で得体の知れない代物が次第にその姿を我々の前に明らかになっていくのだ。

Nursery Rhymes

学童期以前から子供が親しむ児童文学といえば、まず考えられるのがこのNursery Rhymes⁵である。アメリカでは一般的にMother Gooseという呼称で知られているが、その定義は、子供向けの古い詩歌というものである。

Carole H. Carpenter は、ナーサリー・ライムを以下のように簡潔に定義している。

Verses of early childhood from birth through kindergarten—many derived from and still active in oral tradition, together with literary versions purposefully composed for children—abound in literature for youngsters worldwide.⁶

O.E.D. の定義によると、チャイルドとは胎児からの子供を指すので、本来であれば誕生前からの子供向けの韻文詩と定義づけることもできるであろうが、カーペンターのように、口承文学も含めたこども向けに書かれた韻文と限定することができるだろう。無論これは英米に限ったものではな

いので、世界中の韻文と定義されているが、この論文では英語で書かれたということに限定して論を進めていきたいと思う。

カーペンターは続けて、韻文の形式を述べている。具体的には、counting rhyme, bouncing rhyme, lullabies, riddles, short nonsense narratives 等6つの形式をあげている。また、韻を踏むということで子供が覚えやすく親しみやすいというところを強調している。韻をふんだり、リピティションなどの修辭的な技法が用いられているため子供にとっては、とても覚えやすいものになっているのが特徴である。さらにこうした伝統は古くからあり、世代を超えて伝承されてきたもので、いわばコミュニケーションの1つの基礎ともなっていると述べている。

さらにこれが1824年にナーサリー・ライムとして、Iona and Peter Opieが編纂したものが、いわゆる出版物として残っている。この中にはナーサリー・ライムだけではなくバラッドなども含まれており、そこには皮肉やユーモアが散見される。出版物の歴史としては、1766年ごろに出されたJohn Newberyの*Mother Goose's Melody; or, Sonnets for the Cradle*が現れて、その中ではマザー・グースとその音楽性との結びつきがよくわかるようになっている。オリジナルのCharles Perrault's *Histoires or Tales of Past Times, Told by Mother Goose* (1729)では、物語性が強調されているのに対してニューベリーのものは音楽性が強調されているとカーペンターズは述べている。さらには、Robert Chambersの*Popular Rhymes of Scotland* (1826), *Mother Goose's Melodies* (1833)が登場し、その後、1870年のW. A. Cawthorneの*Who Killed Cockatoo?*へつながっていると指摘されている。

そうしてついに児童文学にも挿絵の時代が到来する。口承文学では必要がなかったものの、書籍と言う形になれば、印字された文字だけでは子供が喜ばないことが明白である。『不思議の国のアリス』ではないが、アリスのお姉さんの読んでいた本は文字ばかりで挿絵の全くないもので、アリスにとってはただただ退屈で眠いばかりのものだった。1881年になって、ようやく挿絵入りのマザー・グースが出版される運びとなった。それがKate Greenawayの*Mother Goose; or The Old Nursery Rhymes* というものでこれが世代を渡り人気になり、違う後継者の手を借り、その後次々と重ねることになったという。また、この挿絵を利用した出版物は、その後の児童文学圧倒的な人気で引き継がれていくことになるのは当然だと言える。出版技術の向上により、挿絵に色がつき、カラー印刷が可能になりますます子供の欲求に答えるものになっていった。この流れを受けたものとして、Walter Craneの*Baby Opera* (1877)やArthur Rackhamの*Mother Goose; The Old Nursery Rhymes* (1913)などが登場し、他にも同様なものは枚挙にいとまがない。20世紀に入り、一層そうしたものが数多く出版された。

マザー・グースの標準的な規範

マザー・グースの標準的な規範はないとされており、それを代表する作品もどれかいくつかに限定するようなこともほとんどできないであろう。むしろそれは多岐にわたり、そして様々な場面でほんの一カ所引用されるような使い方も見られる。“Mary had a little lamb”などのような歌が集められ、童話と同様に編纂されてきて様々な印刷物になった。Bruno Bettelheimは童話同様にナーサリー・ライムも子供が現実社会の矛盾や複雑さを理解するのに役立っていると指摘した。ナンセンスで残酷な世界や歴史ファンタジー、それから道徳や不道徳また、戦争や平和、様々な世界の中に内包されている矛盾点などが包括的に描かれており、多様な価値観や問題点を内包しているので内容が平面的にならず豊かに膨らんでいるという評価が成されている。そのことから、長い時代を経て多くの人々に愛されている。

Simply, nursery rhymes offer children access to the truth in a form that they can accept and handle.⁷

ナーサリー・ライムはその読者に平板な事実ではなく真実を示しているというのである。さて、その誕生となると、一応子供向け向けの本として知られているのが、18世紀に入ってからである。夏目康子によると、現存するもののうちで最初の本格的なマザーグース選集とされたのは、1744年にメアリー・クーパーによって出版された『トミー・サムのかわいい歌の本』ということである。この本には40篇の唄が収録されていて、中には現代でもよく知られている唄が含まれている。「ロンドン橋」や「クック・ロビン」などである。⁸ また中には子供向けでないといえがちな差別的なものや残酷な内容のものが含まれており、ナーサリー・ライムの当時の基準が現在のものとはかなりかけ離れていることが一目瞭然である。その理由はその力点が教育的配慮にあるのではなく、子供が楽しく興味を持って覚えられるように、また子供が言葉の発話に積極的になれるようにという言語的視点から主に選ばれたように思われる。

ナーサリー・ライムの発展

19世紀になると、印刷技術の発展でカラー刷りや製本の技術も向上し、ウォルター・クレインなどの挿絵画家が現れ、ナーサリー・ライムはそれを子供に読んで聞かせる大人ばかりではなく、実際にそれを覗き込む子供の間で人気になった。しかし、ナーサリー・ライムの機能は子供を喜ばせるというものだけではなく、むしろ子供が言語習得する上で必要な手段としてナーサリー・ライムが機能していたという指摘には当然ながら耳を傾ける必要がある。⁹ さらにカーペンターは、ナーサリー・ライムこそ子供が文学に親しむ基礎固めのものだと述べている。その例として、例えば「メアリーの子羊」でメアリーの子羊を父親が撃ち殺すというのがある。その撃ち殺された子羊の肉がスライスになってパンに挟まれているというのである。これは一見残酷に見えるが、現実の話である。子供には荒唐無稽な夢の話ばかりだけ教育的だと考えるのは、少し行き過ぎた考え方であるかもしれない。子供には幼いころには、受け入れ難いかもしれないが、現実から目をそらさぬ勇気も必要である。こうした視点からナーサリー・ライムには意図的に、そうした現実の場面を描くものが取られているように思われる。

ナーサリー・ライムのもう一つの機能として考えられているのが、アイデンティティーの刷り込みである。具体的に言えば、国民性やある固有の文化や宗教などをその人間の規範とするために、幼児期に遡って心の中に植え付けていくというものである。それは特に20世紀に入ってから、目立ってきた。その理由は1つには、国が初等教育を担当することになり、表立って自国の文化や歴史をことさら取り入れたものがその国の子供にふさわしいものとして選り始めたということが言えるであろう。しかし、こうした政治的または宗教的な企みがあったにせよ、一方で子供はその言葉の持つ音の美しさを主体的に楽しんでいることも事実である。

マザーグース

ナーサリー・ライムとマザーグースの違いについて、夏目は以下のように書いている。

英語圏の伝承童謡を総称して、イギリスでは **Nursery Rhymes**、アメリカではマザーグースと呼ぶことが多い。もちろん例外もあり、イギリスのビクトリア朝ケイト・グリーナウェイの絵本やアーサー・ラッカムの集成本のタイトルでは、両者を併用している。¹⁰

アンドレア・イメルは、一方で以下のように定義している。

A Legendary crone in European popular traditions associated with fairy tales and nursery rhymes, this character is the modern-day descendent of an ancient type in Western European folklore, which is related to the figures of the witch, garrulous nurse, and the wise woman Mother Bunch—all regarded with suspicion because they possess either magic powers or Secret knowledge (especially on sexual matters).

マザーグースをヨーロッパの伝統の中に生きてきた伝説的な痩せた老婆で、童話やナーサリー・ライムに登場し、西ヨーロッパの民話の中で典型的な登場人物の1人で、魔女や口うるさい乳母などのイメージで多少魔術と性的な意味を含む秘密の知識が豊富な人物として定義しており、夏目のいわばマザーグース・ストーリーとは少し異なっている。しかし、夏目の概括的な言い方も一方では間違いとは言いきれない。一般的に使用されているのは、むしろその通りだと思われるからである。マザーグース自体については、いわゆるペロー童話に由来しているとするのが、ほぼ定説で間違いはなからう。マザーグースが英語圏に初めて紹介されたのは1729年のロバート・サンバーのペロー童話の英訳本、*Stories and Tales of Times Past* からである。さらに1820年代にマンローとフランスが、*Mother Goose rhymes* という名の童謡集を出版する頃までにはアメリカでもこの名がひとつのジャンルとして確立したと一般的にいわれている。

ナーサリー・ライムの行方

19世紀それから20世紀、さらに21世紀に入ってもこのマザーグースを中心としたいわゆる子供向けの童謡はますます形を変えさらにはいろいろなエンターテインメントの形をくわえて、発展していくことは、間違いのないと思われる。挿絵からCDにさらにはアニメやDVDへとナーサリー・ライムは現代風にアレンジされ子供の記憶の中核の一部となり、精神的な成長に必要なビタミンや栄養素として子供から大人へと変容する時期の精神状態に大きな作用を及ぼすのである。無論、教育的な配慮も必要とされるが、ナーサリー・ライムの起源を探れば探るほど、さらに幅広いいわゆる文学としての機能がこれからもずっと大きな地位を占めていくように思われてならない。

児童文学の始まりとしてナーサリー・ライムを取り上げてきたが、そこには歴史的人物や擬人化した動物、さらには魔女や妖精の話など、ジャンルにも時代にもとられない幅広い物語が美しいライムとともに展開し重層的に繰り返される。またそこから学ぶものは教訓だけではない。自国の歴史や文化だけでもない。また宗教だけでもない。これらは、空想と現実とが混じり合いそこから生まれ出るものは、おそらく自由な発想である。ナーサリー・ライムが子供にもたらすのは面白さだけではなくその自由さである。結局そうした自由で無限な発想こそ、子供にとってナーサリー・ライムの持つ機能の中で、最重要なものの一つだと考えられるのである。

注釈

- ¹ Jack Zipes, *The Oxford Encyclopedia of Children's Literature*, Oxford University Press, 2006, p. xxix.
- ² 吉田精一編, 『ジャンルテーマ別「英米児童文学」』, 中教出版, 1987, p. i.
- ³ L.H. スミス, 石井桃子他訳『児童文学論』岩波書店, 2001, p. iii.
- ⁴ スミス, p.10.
- ⁵ この訳語として以降はナーサリ・ライムを用いる。
- ⁶ Jack Zipes, *The Oxford Encyclopedia of Children's Literature*, Oxford University Press, 2006, p. 179.
- ⁷ Zipes, p. 182.
- ⁸ 日本イギリス児童文学学会編, 『英語圏諸国の児童文学 I』, ミネルヴァ書房, 2011, p.38.
- ⁹ Zipes, p. 182.
- ¹⁰ 『英語圏諸国の児童文学 I』, p. 37.

参考文献

日本イギリス児童文学学会編, 『英語圏諸国の児童文学 I』, ミネルヴァ書房, 2011.
吉田新一編, 『英米児童文学』, 中教出版, 1987.

Jack Zipes, *The Oxford Encyclopedia of Children's Literature*, Oxford University Press, 2006.
Opie, Iona and Peter Opie, eds. *The Oxford Book of Nursery Rhymes*. Oxford: Clarendon Press, 1951.
Smith, Lillian H., *The Unreluctant Years*, Cicago: American Library Association, 1953.
Warner, Maria. *From the Beast to the Blonde: On Fairy Tales and Their Tellers*. New York: Farrar, Strauss and Giroux, 1994.